

ローマ人への手紙6章1-11節 「罪に対して死んだ者」

1A キリストの死にあずかるバプテスマ 1-4

1B 罪の中に生きられない私たち 1-2

2B いのちにある新しい歩み 3-4

2A 十字架に付けられた古い人 5-11

1B 無力化された古い人 5-7

2B キリストと共に生きた者 8-11

本文

私たちのローマ人への学びは、前回5章まで来ました。私たちはローマ5章の後半部分で、とても大切な真理を学びました。それは、「ひとりの人によって罪と死が入ったが、もう一人によって義と認められ、命が与えられた。」ということにあります。アダムが罪を犯した時、アダムの子孫である私たち人間が、そこでみな罪を犯したとされました。事実、生まれながらにして罪を持っています。そして死ぬようにされています。ところが、キリストがこの世に来られました。この方が私たちの罪に対する神の罰を、ご自分の身に十字架上で受けられて、その義の行いをもって神は私たちが罪を犯していない、とみなしてくださいました。それゆえ、罪によって死ななければいけないという定めから解き放たれて、キリストにあって生きるようにしてくださいました。ですから、私たちはアダムにあって死んだ者でありましたが、キリストにあって生きる者とされました。それはちょうど、アダムを長とする国から、キリストを長とする国に移されたのと同じです。

そこで私たちは、新しい話題に移ります。これまで信仰によって義と認められるということについて、「いかに神の罪に対する怒りから、救われるのか。」ということを見ました。キリストが、その神の怒りを十字架の上で身代わりに受けてくださったことによって、私たちに対する神の救いは保証されています。けれども、主が十字架の上で行われたことはそれだけではありません。主が、私たちが罪を犯さなくてもよいようにしてくださいました。罪から来る罰からの救いだけでなく、罪そのものの持つ力から救われた、解放されたという真理です。自分がイエス様を信じて、地獄から救われて天国に入ることができるようになったというだけが、福音ではありません。自分を虐げ、支配している罪から自由にされて、神に従うことができるようにくださった、というのも福音です。これを、他の言葉で「聖められた生活」あるいは「聖化」とも呼びます。この内容が、6章から8章17節にまで続きます。私たちキリスト者が、日々戦っている内容に入ります。

1A キリストの死にあずかるバプテスマ 1-4

1B 罪の中に生きられない私たち 1-2

1 それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。2 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもそ

の中に生きていられるでしょう。

パウロは、「それでは」という言葉で始めています。この「それでは」は、5章20節のことです。「罪の増し加わるところには、恵みもみちあふれました。」とあります。これまで、いかに罪深い生活を歩んでいたとしても、どんなに汚点のある人生だったとしても、負い目を持っていたとしても、主が流された血潮によってそれらの罪は全て洗い清められ、神の恵みが満ちあふれます。最も罪深い者が、最も祝福された者となります。放蕩息子が、父の家に迎え入れられて、大きな祝宴を得て、息子の地位を戻してくださったあの恵みが、罪を犯した者たちに満ちあふれるのです。

この恵みの真理を聞くと、「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」という疑問が湧くわけです。罪が増し加わったところに、これだけの恵みが満ちあふれるのだから、それでは罪の中に留まっていれば、それだけ神の罪の赦しを経験して、その恵みに預かることができるのではないか、という論法です。全くばかげた話だと思いかもしれませんが、意外に、罪から離れてないで生きる者たちが、使っている弁解であります。「平日は罪の生活を歩んでいるけれども、日曜日に礼拝に行って、罪を赦していただき、そして心がきれいにされたのだから、また罪を犯しても赦されるから、犯そう。」という誤った考えであります。あるいは、律法主義的な考えの人は、そんな考えになるから危険であると言います。「恵みを強調すると、人がもっと罪を犯しやすくなる。だから、神の律法をしっかりと守るように戒めるべきだ。」とするのです。

パウロは、これらの考えを「絶対にそんなことはありません。」と言って一蹴しています。これは、「そんなことは、考えもしてはいけません。」という意味です。恵みが増し加わるからこそ、罪から離れて生きることができる、というのが福音なのです。

そこで、「罪に対して死んだ私たち」というのが、6章において大切になる真理です。ここから、とても大切な議論に入ります。それは、キリストが十字架の上で死なれたのは、私たちの罪のために死なれただけでなく、私たちが罪に対して死ぬようにしてくださった、ということです。罪から来る罰を無効にするために死なれただけでなく、罪の持つ力を無効にするためにも死んでくださった、ということです。罪の中に生きるのではなく、罪に対して死んだ者としてくださいました。

「死ぬ」という言葉の定義がとても大切です。「切り離される」という意味合いがあります。源から離れる時に、命を失います。コンセントを外したら、電気器具が全く役に立たない状態があります。存在していても、生きていないのです。同じように、神の命から離れていれば、その人の体は生きていても、死んでいるのと同然です。人の罪が神から人を引き離し、それで人は罪の中で死んでいました。つまり、「罪に対して死んだ」というのは、罪とのつながり、結びつきが切れたということです。罪から引き離されました。キリストに結びつき、神のいのちにつながり、罪から切り離されました。これを他のことばで、「聖められた」あるいは「聖別された」と言います。聖書の「聖める」です。元々は「別つ」という意味があります。罪から別たれ、神のものとなったのです。

ですから、罪そのものが無くなったということではありません。罪は、生きています。私たちはキリスト者になって初めて、罪との壮絶な戦いの中に入ります。キリスト者になる前は、当たり前のように行っていたことがあります。けれども、神の御霊によって新たに生まれて、自分の思いの中で肉と霊との対立が起こるのです。その戦いについて、もがきについて、パウロはこれまでもか！と言わんばかりに、次のローマ 7 章で述べています。ですから、罪がなくなったということではありません。そうではなく、「罪を日常的に行なう、そうした生活から縁が切れた。」ということです。罪は生きているのですが、それを横目で見ながら、「自分はこれに支配されない。自分はこの生活からは引き離されたのだ。」ということのできる力が与えられた、ということです。

そしてさらに大事なのは、「罪に対して死んだ」という時に、それはすでに過去に行われたことを意味します。「死んだ」という言葉は、これからすることではありません。「私は、罪が赦されたクリスチャンになった。これからは、罪から離れるように努力しよう。」ではないのです。すでに起こったこととして、パウロは述べています。そうです、約二千年前にキリストが十字架で死なれました。その時にすでに、私たちは罪に対して死にました。ここに福音の深みがあります。私たちが 5 章で学んだように、アダムが罪を犯した時に、彼は全人類の代表として罪を犯しました。頭であるアダムが罪を犯したので、全人類がある意味で罪を犯したのです。同じように、頭であるキリストが罪に対して十字架上で死なれた時に、キリストを信じる者も罪に対して死にました。アダムにあつて、全人類が罪を犯したのと同様に、キリストにあつて私たちは罪に対して死んだのです。

キリストは、私たちの罪のために死なただけではありません。私たちの罪に対して死なれました。その罪の力を無きものとしてくださいました。効力を失わせてくださいました。キリストがそこで死なれた時に、私たちも同じようにして死んだのです。そして、キリストがよみがえられて、私たちもキリストにあつて生きる者となりました。すべて、キリストにつながったものとなったのです。この変化を言い表している御言葉を二つ紹介します。一つは、コリント第二 5 章 17 節です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」もう一つは、コリント第一 6 章 9-11 節、特に 11 節です。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のあの人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

2B いのちにある新しい歩み 3-4

そしてパウロは、私たちが罪に対して死んだという事実を、バプテスマの中に確認していきます。

3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。4 私たちは、キリストの死にあ

ずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

3節は、「知らないのですか」という言葉から始まります。この後にも「知っています」という言葉があり、信者であれば知っていることの中に、罪に対して死ぬという真実が明らかにされていることを説明していきます。

「キリスト・イエスにつくバプテスマ」とあります。「バプテスマ」という意味は、「浸す」という意味です。あるいは、「染める」とも訳すことのできる言葉です。紫色の染料に、白の布を入れれば、紫色に染まるということなのです。したがって、この意味するところは「一つになる」という意味です。自分がその対象に浸かる、一緒になる、そこに付くものになる、ということです。例えば、コリント第一 10 章 2 節には、「そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け」とあります。イスラエルの民が、主が語られたようにエジプトから出ました。けれども、エジプト軍が彼らを追ってきます。彼らは恐れて、「なぜ私たちをここまで連れてくるのですか！」とモーセに訴えました。けれどもモーセは主に祈って、紅海を分けてくださいました。そして海の中を通過して、そして雲がエジプト軍とイスラエルの民の間に入り、追いつけないようにしました。そして、イスラエルの民が向こう岸にいたら、海が元に戻り、エジプト人は全ておぼれ死んだのです。それで、彼らはモーセに付いていく者たちとなりました。神がモーセを通して自分たちを導いていることを知りました。モーセと同じ神の運命共同体になった、ということです。

そして、ここでは「キリスト・イエスにつくバプテスマ」と言っています。さらに、「その死にあずかるバプテスマを受けた」と言っています。キリストが十字架の上で死なれ、葬られました。ゆえに、イエスの御名によって水の中に浸されることは、罪によって死んでいた私がキリストと共に死んで、葬られたことを意味します。そして、墓の中からキリストが甦りましたが、同じように水の中から出てくる時にキリストと共に甦ったことを意味します。私の人生は全て、キリストの内にあるようになった以上、キリストにあって私も同じように、古い自分に対する死、新しいキリストにある命にあずかったのです。

そして、「いのちにあって新しい歩みをする」とあります。これには「新しい命が与えられた」という意味と、「新しい歩み、生活がある」という意味があります。新しくされたことについては、私たちはいろいろな面で新しくされました。まず、新しい心と霊に変えられました。「エゼキエル書 36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」そして、新しい名前も与えられています。「黙示 2:17 また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」そして、先に読みましたがコリント第二 5 章 17 節には、新しく造られた者となりました。

そして、黙示 5 章 9-10 節には、「新しい歌」が与えられています。「彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」そして、私たちに生きていくための新しい命令が与えられました。「ヨハネ 13:34-35 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」このように、私たちは自分の本質も、また自分の歩みも全く変えられた者となりました。

2A 十字架に付けられた古い人 5-11

このように、罪に対して死んだという事実が、イエスの御名によるバプテスマに表されていたことが分かりました。そしてパウロは、実際に起こったこと、つまりキリストの十字架の死と復活において、何が起こったかを説明します。

1B 無力化された古い人 5-7

5 もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

パウロは、私たちが新たな命にある歩みをするのは、キリストの死と同じようになっているからであることを話しています。私たちがまだ生きているなら、死者からの復活にあやかることはできません。死ぬからこそ、甦ることができます。したがって、まず自分自身が死んだ者とみなすことが大切です。そのことをパウロは、ガラテヤ書 2 章 20 節で話しています。「ガラテヤ 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」自分自身についての認識は、「キリストと共に十字架に付けられている」ということです。もう死んでしまったのです。そして、今、生きているのは、専らキリストを信じる信仰によってです。しかも、自分を愛してやまず、ご自身の命をお捨てになってくださったということを信じる、その信仰によって生きています。

このように、キリストの死によって自分が死んでいるとみなすことによって、初めてキリストの命にあやかることができます。そして、体においても復活を体験します。「ピリピ 3:20-21 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」

6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがも

はやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

ここにはっきりと、私たちの主イエス様が十字架で死なれた時に、起こったことをパウロは話しています。そこで、キリストは私たちの罪のために死なただけではありません。私たちが、キリストの十字架と共にそこに付けられていました。その私たちというのは、「古い人」だと言っています。その古い人とは、5章で読んだ「アダムにある自分」のことです。罪によって生まれ、罪の支配の中で生きる、そして滅びるしかないその自分であります。それが、「キリストとともに十字架につけられた」とあります。これが歴史的事実です。キリストが二千年前に死なれた時、それは自分の罪のためであったことであると同時に、私がそこでキリストと共に十字架に付けられました。

そして、その出来事によって「罪のからだが減びて」とあります。この「滅びる」という言葉のギリシヤ語は「無力となる」という意味です。罪に支配されている体が、無力化されました。体は存在しているのですが、そこにある罪の力が滅ぼされました。再び、無くなった、消滅した、ということではありません。力を失ったということです。そして、これを「知っています」とあるとおり、私たちは信仰によってその事実を受け取ります。自分の罪のために死なれたことを信じているのと同じように、私の罪のからだが無効化されたのだ、ということを感じるのです。

7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

死んでしまったら、どんな誘惑もまったく誘惑になりません。それまでアル中だった人が死んでしまって、その死体にどんなにお酒の瓶を回りに置いたところで何ら効力を発揮しません。そうした意味でパウロはここで話しています。私たちが罪から解放される方法は、古い人が死んだとみなすことによるのみです。その人がまだ生かされ、改善するから誘惑に勝てるのだということではありません。もう死んでしまった、とみなすからこそ、罪から離れることができます。

このようにして、死んでしまった古い人を古い人として生活の中で脱ぎ捨て、御霊によって新しくされた新しい人を身に付けることについて、パウロはエペソ書でこのように話しました。「4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」そして、古い人として嘘をつくことがあるけれども、真実を語る事が新しい人であり、また盗むことも古い人であるけれども、人に施すために、骨折って働きなさいとあります。そして苦みを持つたり怒ることは脱ぎ捨てて、互いに赦し、親切にすることが新しい人であると言っています。このように行なう自由が、私たちが罪に対して死んでいることによって与えられているのです。

2B キリストと共に生きた者 8-11

8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じま

す。

パウロは、私たちが死んでいることを強調してから、そしてキリストの復活にもあやかっていることを強調します。キリストの復活の力によって、この死んだ体を持っている私たちが罪の中で死ぬことなく、そのキリストの命によって生きることができます。主が生きてくださるので、その命が私たちから流れ出ます。その中で生きるのです。

9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。

イエス様の復活は、再び死ぬようなものではありませんでした。死そのものを打ち滅ぼすものです。「使徒 2:24 しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」罪を犯した者は必ず死にます。しかし、キリストはご自身が罪を犯されませんでした。死に至るまで神に忠実であり、義を全うされました。それゆえ、罪なき方が死罪を受け、そのままにいることなどあり得ないのです。キリストが甦られたことによって、キリストに付く者たちも義と認められるようにしてくださったのです(ローマ 5:25)。そして、義と認められた者は、罪に対する死をも効力を発揮しませえん。キリストが甦られたように、私たちがキリストにあって死んでも甦ります。

10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。

「ただ一度」という言葉がここでは大事です。「ヘブル 10:10-14 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。」つまり、罪の赦しの効力は途中で半減するものではないのだ、ということです。永遠に全うされた、二千年前の十字架によって、罪が一切切、取り除かれました。もう繰り返す必要はありません。

したがって、キリストが再び死なれる必要はありません。甦られましたが、これからは永遠に父なる神に対して生きられます。このキリストにあって、私たちが生きることができるのです。そして最後、結論としての言葉がとてつもなく大事です。

11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

1 節からの話をパウロは、ここで少しまとめています。これまでは、「知っている」ということを強調しました。ここでは、「思いなさい」あるいは「みなしなさい」という言葉で命じています。この「思う」という言葉は、私たちが信仰によって、神が義とみなしてくださる、という言葉と同じです。つまり、私たちは罪人なのに、あたかも罪を犯したことのないようにみなされる、数えらえるということです。同じように、私たちは罪に対しては死んだ者だとみなすのです。「罪は生きています。」と思うでしょう。けれども、事実は死んでいるのです。ですから、信仰の立場を取ります。死んだ者としてみなすのです。

これが、聖霊が私たちの肉の弱さを助けてくださる時、神の聖さの中に生きる時に必要な、根本的な信仰の立場です。私たちは規則によって、律法によって、義を成し遂げようとしてしまいます。罪意識で責められるので、行ないでそれを補おうと努力します。自分が罪に対して死んでいる、この体は死んだものであるにも関わらず、そこに何か力があるかのように動いてしまいます。しかし、そうではありません。自分には力がない、全く死んでしまっている、だから十字架に付けてしまうのです。キリストが十字架の上で死なれましたが、私の古い人が死んでしまったことを認めるのです。そうすれば、ここに書いてあるように、「神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者」とみなすことができます。御霊が働いてくださいます。聖化も、義認も、二千年前のキリストの十字架で成し遂げられたことです。それを、私たちが日々、信仰によって受け入れていくことで、キリストの義が命と共に私たちの生活に現れます。